

埼玉は「カネどころ」～新紙幣を巡って～

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役／チーフエコノミスト 大西 浩一郎

この度、ぶぎん地域経済研究所の一員となり、当欄を担当することになりました。読者の皆さまとともに、埼玉県経済の様々な側面について理解を深めていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

◇ ◇ ◇

さて、どんなに人気のメニューでも苦手な人は必ずいますし、あの大谷翔平選手にも、やはりアンチと呼ばれる人はいるようです。もし、全ての人が愛してやまないものがあるとすれば、それはお金でしょう。2024年7月3日、20年振りに新しい紙幣の流通が始まりました。

お札とも、紙幣とも、日本銀行券とも呼ばれる人気者。今回は、埼玉の皆さんだからこそ、新札のことを知っていただきたいと思い筆をとっています。なぜ埼玉なのかといいますと、ご存知のとおり、新しい一万円札の肖像が現在の深谷市出身の渋沢栄一翁だからというのが一点目です。二点目として、戸田市には日銀の発券センターがあり、ここで日銀と民間金融機関との紙幣の受け払いや、市中から戻ってきた紙幣の鑑査などが行われているということがあります。埼玉は、「コメどころ」ならぬ「カネどころ」なのです。

ここでは、筆者なりに押さえていただきたいと思うポイントを3点挙げます。新札をお持ちの読者はお手元にご用意ください。

第1に、前回、今回と20年ごとに改刷が実施された大きな理由である偽造防止技術の最新化です。「10000」の部分に触ってみてください。インキが高く盛り上がっているのが分かりますか？また、「すかし」については、肖像だけでなくその背景に複雑な模様が映っています。さらに、光っているホログラムの図柄は、縦横と見る角度によって全く違うものになります。他にもさまざまな偽造防止技術が盛り込まれており、最新の技術力と精巧な職人技はため息が出るほどです。

第2に、ユニバーサルデザイン、つまり「どなたにでもわかりやすく」というコンセプトの反映です。例えば、中央の金額表示をみますと、従来のお札では「壹万円」

と、漢字でしかも旧字体でした。これが新札では「10000」と大きなアラビア数字になっており、これなら外国人の方にも一目瞭然です。また、目の不自由な方の立場に立って、指で触って券種がわかるマーク——両サイドや上下にある11本の斜線——をこれまでより大きくし、券種ごとに位置を変えろといった工夫もなされています。

第3は、あまり話題にのぼりませんが、実はお札のサイズは全く変わっていない、という点です。聖徳太子の一万円札を覚えていますか？縦84ミリ、横174ミリとかなり大きめで、もらうとありがたい気がしたものです。それが1984年（昭和59年）の改刷で、一万円札は縦76ミリ、横160ミリと小さくなり、以後は2004年（平成16年）の改刷、そして今回と据え置かれています（注）。これには、印刷や保管、鑑査する側の事情もあるでしょう。券売機、自動販売機が社会の隅々に行き渡ったことに対する配慮もあるでしょう。ともあれ、40年前にたまたま決まったお札のサイズは、現在だけでなく、おそらく将来も変わらない（変えられない）のだらうと思うと、どこか不思議な感じがします。

以上、「カネどころ」・埼玉の皆さんなら知っていて欲しい新札のお話でした。新札の細部にわたる説明は、発行元である日本銀行（<https://www.boj.or.jp>）や、印刷を行う国立印刷局（<https://www.npb.go.jp/>）のウェブサイトをご覧ください。なお、これまでの紙幣は、新札が発行された後も引き続き使うことができます。誤った情報、詐欺行為にはご注意ください。

（注）5千円札だけは2004年の改刷（新渡戸稲造→樋口一葉）で横幅が1ミリ長くなりました。

